

第8章 風 害

8-1 概 要

新建築物の存在が、周辺の風環境に及ぼす影響について検討を行った。

8-2 調 査

既存資料及び現地調査により、現況の把握を行った。

(1) 調査事項

- ① 土地建物の状況
- ② 事業予定地及びその周辺の風況

(2) 調査方法

① 事業予定地及びその周辺の土地・建物の状況

以下の既存資料で得た情報を現地踏査により確認し、補正した。

- ・「名古屋市建物用途別現況図」（平成 20 年 名古屋市）
- ・「ゼンリン住宅地図（名古屋市中村区）」（2009 年 株式会社ゼンリン）
- ・「ゼンリン住宅地図（名古屋市西区）」（2009 年 株式会社ゼンリン）

② 事業予定地及びその周辺の風況

以下の既存資料を収集した。

- ・気象庁気象統計情報（2005 年 1 月 1 日～2009 年 12 月 31 日）

(3) 調査結果

① 土地建物の状況

建物用途の状況は図 2.8-1 に、建物階数の状況は図 2.8-2 に示すとおりである。

事業予定地周辺は商業地域であり、建物用途では商業施設・一般店舗・商業的サービス施設が多くを占め、その周縁部には供給・処理・運輸施設が存在している。事業予定地北側は、事業予定地から離れるにしたがい住居施設の割合が増加する傾向がみられ、また、教育施設が点在している。

建物階数の状況をみると、事業予定地周辺は 3～9 階の中高層の建築物が多くを占めている。事業予定地北側は、事業予定地から離れるにしたがい 1～2 階の低層の建築物の割合が増加する傾向がみられる。





② 事業予定地及びその周辺の風況

名古屋地方気象台（標高 51.1mの地上高 18mで観測）における日最大平均風速について、2005 年から 2009 年までの 5 年間の風配図は図 2.8-3 に示すとおりである。ここで日最大平均風速とは、1 日のうちで最大の平均風速（10 分間の平均値）を表す。

名古屋地方気象台における過去 5 年間の日最大平均風速の風向は、西北西（WNW）及び南（S）が卓越している。

日最大平均値の風向・風速階級別出現頻度は、資料 10-1（資料編 p.164）に示すとおりであり、風速階級 5（4.1m/s 以上 5.0m/s 以下）の出現頻度が最も高い。

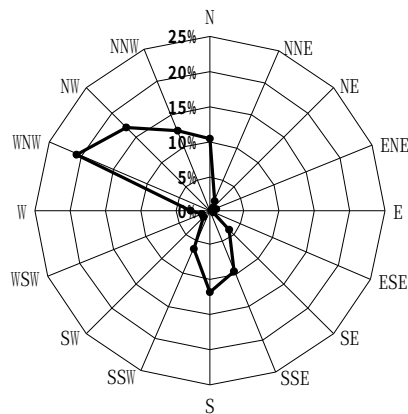


図 2.8-3 日最大平均風速の風配図

8-3 予 測

(1) 予測事項

- ・新建築物による風向・風速の変化
- ・強風出現頻度の変化

(2) 予測対象時期

新建築物の存在時

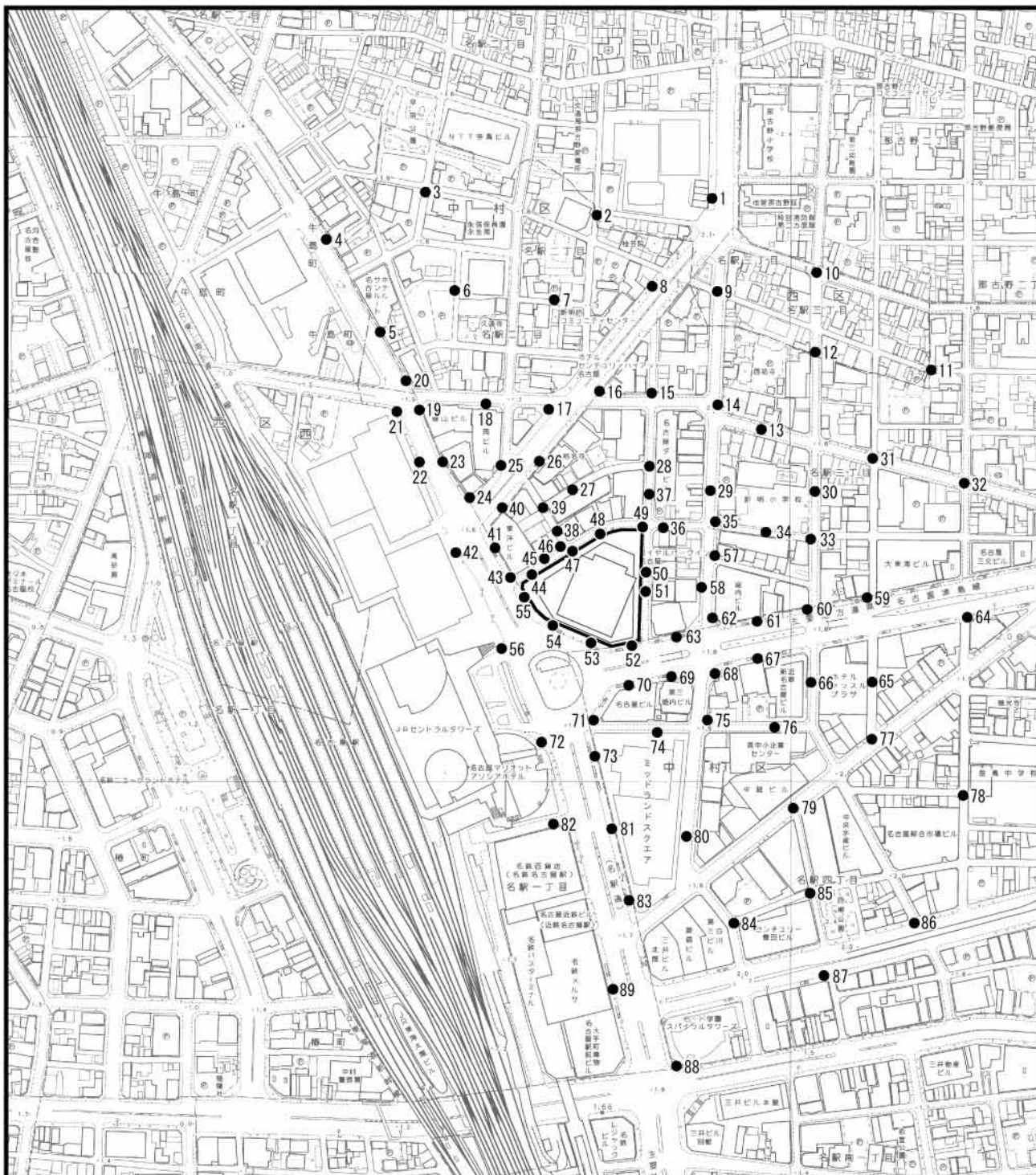
(3) 予測場所

予測場所は図 2.8-4 に示すとおりであり、強風の発生が予想される場所、人の歩行する場所等を考慮して、新建築物を中心に半径約 500mの円内で、かつ、調査対象区域内の 89 地点に設定した。予測高さは、地上 1.5mとした（併せて実施した事業予定地内の空地における予測場所、予測結果等については、資料 10-8（資料編 p.182）参照）。

(4) 予測方法

① 予測手法

新建築物の建設による風環境の変化を予測するために、数値シミュレーションを行った（数値シミュレーションの概要は資料 10-2（資料編 p.165）参照）。



□ : 事業予定地

● : 予測地点



Scale 1:6,000

0 60 120 240m

図 2.8-4 予測地点図

② 予測条件

ア 解析モデル

解析ソフトは、Zephyrus (ver.204) とした。解析領域全体は 1.6km 四方とし、新建築物を中心に約 1.3km 四方の範囲にある市街地の建物の概略形状をモデル化した。乱流モデルは標準 $k-\varepsilon$ モデルを用い、定常解析を行った。解析条件を表 2.8-2 に、解析モデルの概要を図 2.8-5 に示す。

表 2.8-2 解析条件

項 目	内 容
使用ソフト	Zephyrus (ver.204)
乱流モデル	標準 $k-\varepsilon$ モデル
解析手法	定常解析
離散化手法	有限体積法
最小メッシュ	水平面は 2m、高さ方向は 0.6m、
解析領域全体	$x \times y \times z = 1,600\text{m} \times 1,600\text{m} \times 800\text{m}$
流入境界	地表面粗度区分 IV (べき指数 0.27) 高さ 18m の風速を無次元風速 = 1.0 としている。 高さ Z の流入風速 $= 1.0 \times (Z/18)^{0.27}$
側面境界、上空境界	滑り壁
建物壁面境界、地面境界	滑面での対数則
収束判断	全ての変数の変化量が 0.001 以下または 繰り返し最大 20,000 回

イ 解析ケース

解析は、新建築物建設前と建設後の 2 ケースとした。

(ア) 新建築物建設前

事業予定地内には現況施設として大名古屋ビルとロイヤルパークイン名古屋が存在し、また、事業予定地周辺の開発計画である名駅一丁目北地区及び南地区についても、建替え前の建築物が存在しているものとした。

(イ) 新建築物建設後

新建築物建設後は、事業予定地内と、事業予定地周辺の開発計画である名駅一丁目北地区及び南地区に新建築物が存在しているものとした。

なお、名駅一丁目北地区及び南地区における新建築物の位置及び形状は、名駅一丁目北地区及び南地区の環境影響評価準備書より読み取るとともに、植栽計画については各事業者への聞き取りにより設定した。

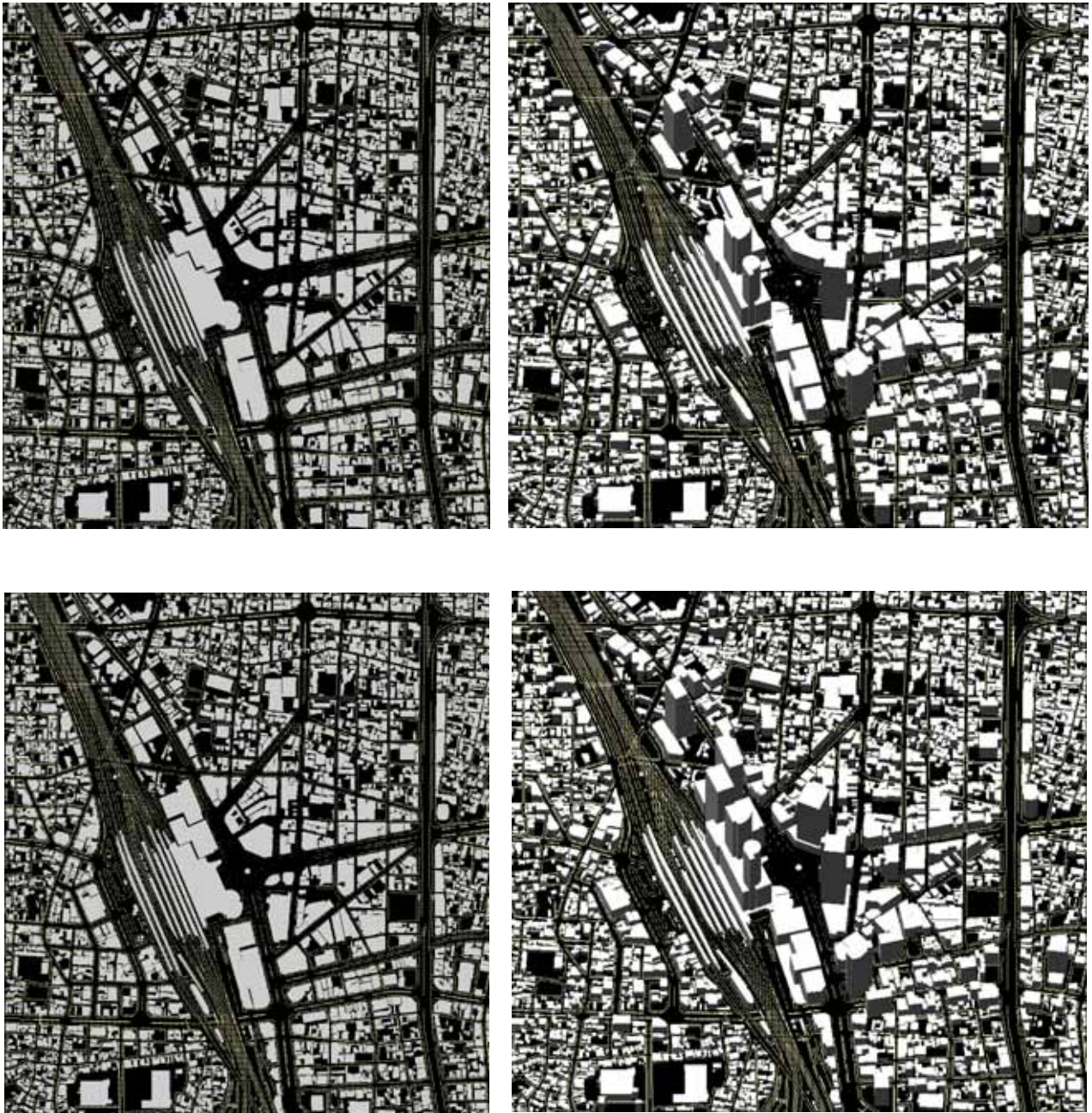


図 2.8-5 解析モデル（上段：新建築物建設前、下段：新建築物建設後）

ウ 解析気流

事業予定地及びその周辺は、土地利用状況より中高層建築物（4～9 階）が主となる市街地であり、既存建物の密度、階数等の市街地の状況より地表面粗度区分Ⅳが相応しいと考えられることから、ベキ指数 0.27 を用いた（平均風速の鉛直分布は資料 10-3（資料編 p.168）に、流入境界条件は資料 10-4（資料編 p.169）参照）。

エ 風環境の評価

数値シミュレーションで得られた予測結果に対して、表 2.8-3 に示す日最大瞬間風速の出現頻度に基づく尺度を用いて評価を行った。

表 2.8-3 は、長期にわたる住民の意識調査や数多くの地表付近における風観測、被害調査に基づいて作成されたものである。これは、空間の使用目的に応じて風の影響を受けやすい順番にランク 1～3 の分類を行い、各々のランクに対して許容される超過頻度（日最大瞬間風速 10m/s、15m/s、20m/s を超える頻度）を示している（風速超過確率の算出方法は、資料 10-5（資料編 p.170）参照）。

風環境評価尺度に基づく確率評価方法は、予測地点毎にそれぞれのランク（強風による影響の程度）について 3 つの評価風速毎の発生許容頻度があり、各々の評価風速について満たさなければそのランクの風環境としてはふさわしくないことになる。この考え方により、予測地点毎に最も大きいランクを評価の対象とした。

表 2.8-3 風環境評価尺度

強風による影響の程度		対応する 空間用途の例	評価する強風のレベルと 許容される超過頻度		
			日最大瞬間風速 (m/s)		
			10	15	20
			日最大平均風速 (m/s)		
			10/G.F	15/G.F	20/G.F
ランク 1	最も影響を受けやすい 用途の場所	住宅地の商店街 野外レストラン	10% (37日)	0.9% (3日)	0.08% (0.3日)
ランク 2	影響を受けやすい 用途の場所	住宅地 公 園	22% (80日)	3.6% (13日)	0.6% (2日)
ランク 3	比較的影響を受けにくい 用途の場所	事務所街	35% (128日)	7% (26日)	1.5% (5日)

注1) 日最大瞬間風速：評価時間2～3秒の日最大値を示す。

2) 日最大平均風速：10分間平均風速の日最大値を示す。

3) G.F：ガストファクター（地上1.5m、評価時間2～3秒）

密集した市街地(乱れは強いが、平均風速はそれほど高くない) 2.5～3.0

通常の市街地 2.0～2.5

特に風速の大きい場所(高層ビル近傍の増速域など) 1.5～2.0

本予測では、資料10-5（資料編p.170）に示す方法によりG.Fを算出した。

4) 本表の読み方：例えば、ランク 1 の用途では、日最大瞬間風速が10m/s を超過する頻度が10%（年間約 37日）以下であれば許容される。

出典：「都市の風害問題と確率」（1982年 村上周三、建築雑誌）

(5) 予測結果

① 新建築物による風向・風速の変化

年間を通しての卓越風向である西北西（WNW）と南（S）の2風向について、新建築物の建設前及び建設後における風向・風速の変化は、図 2.8-6 に示すとおりである。

なお、図中では、名古屋地方気象台における風速を 1.00 とした場合の各予測地点の風速値と、風向を組み合わせたベクトルで表現した（各予測地点における風速値は、資料 10-6（資料編 p.172）参照）。

② 強風出現頻度の変化

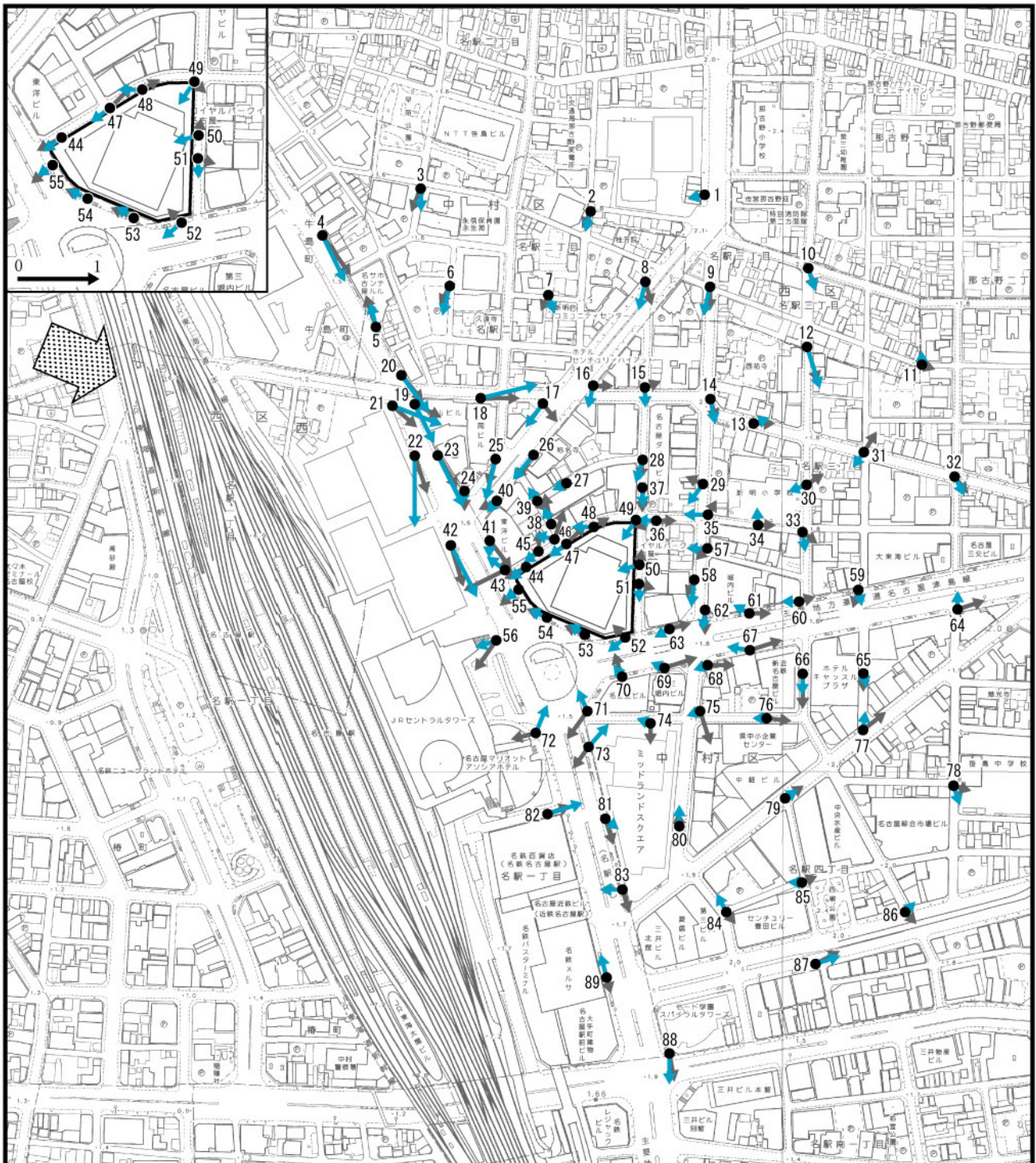
新建築物建設前及び建設後における風環境の変化は、表 2.8-3 及び図 2.8-7 に示すとおりである（各予測地点における風速超過確率は資料 10-7（資料編 p.180）参照）。

これらによると、新建築物建設後にランク 3 を超える地点はないと予測される。また、風環境のランクが上がる地点は 16 地点（ランク 1 からランク 2 になる地点が 12 地点、ランク 2 からランク 3 になる地点が 4 地点）、風環境のランクが下がる地点は 5 地点（ランク 2 からランク 1 になる地点）と予測され、その他の地点については風環境の変化はないと予測される。

表 2.8-3 風環境評価尺度に基づく風環境の変化（新建築物建設前及び建設後）

新建築物 建設後 新建築物 建設前	ランク 1	ランク 2	ランク 3	ランク 3 を超える
ランク 1	1～3, 5～11, 13～17, 24, 26～40, 46～49, 53, 57, 59～61, 63～65, 68, 70, 74, 76～80, 82, 84～89	19～21, 25, 44, 45, 50～52, 54, 55, 58		
ランク 2	66, 67, 69, 75, 83	12, 41, 43, 56, 62, 71～73, 81	18, 22, 23, 42	
ランク 3			4	
ランク 3 を超える				

注) 各予測地点のランクは、新建築物建設前・建設後ともに日最大瞬間風速 10m/s、15m/s、20m/s の各々について最も大きいランクで区分した。



□ :事業予定地

← :建設前

→ :建設後
(風 向)

→ :卓越風向

注)名古屋地方気象台における風速を1とし、
その長さを 0 → 1 とする。



Scale 1:6,000

0 60 120 240m

図 2.8-6(1) 風向及び風速の変化
(風向: WNW の場合)